論文審査の結果の要旨

氏名：宮　田　文　久
博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）
論文題名：現代日本文化における災厄の表象―「越境」と「戦争の記憶」の理論的交点―
審査委員：（主査）　教授　松岡　直美
（副査）　教授　竹野　一雄　　慶応義塾大学教授　浜　日出夫

１．本論文の目的

現代日本文化における災厄の表象が、主に 20 世紀中葉以降の国内外の「越境」と「戦争の記憶」をめぐる言説と理論が交わるところに成立していることを、複数ジャンルの文芸表象を具体的に検証し、明らかにする。背景には、21 世紀において「越境」が地球規模で常態となり、また「戦争の記憶」が同じく地球規模での破壊的暴力によって絶えず更新されるという状況があるのだが、9.11 や 3.11 などと記号化される同時多発テロや対テロ戦争、大震災、核災害といった今日的災厄を表象するにあたっての方略と可能性を探求する。

２．本論文の構成

序章
第１章　「越境」による共同体性の解除
　第１節　「越境」表象の発生と拡大
　第２節　共同体的文化観を乗り越える
　第３節　「内なる越境」における脱共同体性
第２章　「戦争の記憶」における共同体性の解除
　第１節　「集合的記憶」論
　第２節　「新しい戦争」の時代の「戦争の記憶」
　第３節　言語と記憶―非政治性の政治性へ―
第３章　「越境」の普遍性―リービ英雄『千々にくだけて』―
　第１節　越境者としてのリービ英雄とその文学
　第２節　『千々にくだけて』―越境者による＜9・11＞への応答―
　第３節　開かれた「私」という主体
第４章　「記憶」の個人性―『ヒロシマ・モナムール』から『H story』へ―
　第１節　『ヒロシマ・モナムール』の射程
　第２節　『H story』の問題提起
　第３節　「断絶」による「継承」
第５章　「越境」と「戦争の記憶」の臨界点―岡田利規『三月の５日間』―
　第１節　「内なる越境」と、「超口語」による「翻訳」
　第２節　共同体的記憶からの距離
　第３節　アクチュアルな非政治性と他者
終章
注
参考文献

３．本論文の概要

序章

本研究の目的と意義は「越境」と「戦争の記憶」の交差するところに今日的災厄の表象可能性があることを理論的に明らかにし、今後の文芸表象の方向性を示すとともに、これを享受する主体の「内なる越境」

を促すことにある。21 世紀初頭の 10 年間に国内で制作発表された災厄の表象に取り組んだ文芸作品を研究の対象とする。理由は、これらの作品群が「越境」し、「狭間」にある主体を抽出し、増殖を続ける「戦争の記憶」を自在に参照して語り直すことで、当事者性に捉われることなく、近代の共同体からも距離をおき、今日的災厄の表象に至っているためとする。研究方法としては、20 世紀中葉以降の国内外における「越境」と「戦争の記憶」をめぐる多領域における主要な理論を再訪し、その交わるところをプラットフォームとして研究対象の検証と分析を行うとする。

第 1 章　「越境」による共同体性の解除

「越境」をめぐる国内外の議論を総括している。海外発祥のクレオール文学論、亡命文学論、マイナー文学論、そしてポストコロニアル文学批評と日本への受容史を確認する一方、日本文学においては、90 年代初頭にリービ英雄が提唱した「狭間にあること」という「越境」概念を越境文学論の起点としている。安部公房にまで、その系譜を遡りつつも、「越境」を植民地主義・帝国主義の地理的・歴史的に固定された現象としてではなく、また、物理的越境者・複数言語使用者といった個人的特殊性に帰属させるのではなく、個々の主体による「内なる越境」、すなわち「越境」の内在化にまで普遍化して捉えている。さらには欧州評議会の文化社会的統合理念である複言語・複文化主義、その起点ともなった社会学領域からの「複数的人間」論にも繋げて、「越境」を国家や民族等の共同体から脱却し、共生を促すための心理的装置としての位置付けを試みている。

第 2 章　「戦争の記憶」における共同体性の解除

「戦争の記憶」をめぐる社会学、歴史学、言語論、国際関係論、市民社会論など多分野における議論において、共同体性解除に向かう営為を再確認している。国外のものとしてはベンヤミンの言語論／歴史認識、シュミットの「政治」論、アルヴァックスの「集合的記憶」やノラの「記憶の場」論を再考し、国内の議論としては「歴史認識論争」を戦後 70 年の地平から再考、さらに 1995 年の阪神・淡路大震災をめぐる記憶の語りを取り上げて、その「共同体主義」および「断絶」と「継承」について批判的考察を加えている。また、同時多発テロや対テロ戦争といった新たな戦争の記憶がメディアによって大量に産出・発信され、20 世紀の「戦争の記憶」／「新しい戦争の記憶」／新たな「新しい戦争の記憶」と入れ子式に増殖を続けている現状を説明している。

第 3 章　「越境」の普遍性―リービ英雄『千々にくだけて』―

アメリカ出身で英語を母語とする日本文学研究者・翻訳者・作家であるリービ英雄が＜9・11＞を私小説として表象した『千々にくだけて』（2005）を取り上げ、分析している。止めようもなくナショナリズムになだれ込むアメリカの世論やメディアの言説に抗って、越境者たる中心人物かつ創作主体が＜9・11＞という「新しい戦争」を太平洋戦争についての日本側の記憶も挿入しつつ日本語で書き上げていく過程を丁寧に辿っている。「内なる越境」と「戦争の記憶」による共同体からの離脱によって災厄を表象するテクストとして評価している。

第 4 章　「記憶」の個人性―『ヒロシマ・モナムール』から『H story』へ―

デュラス／レネの『ヒロシマ・モナムール』（1959）と、そのリメイクを試みた諏訪敦彦の『H story』（2001）を比較考察している。両者ともヒロシマを映像化することについて映像化し思索するメタ・フィルムであり、「戦争の記憶」の内在化を課題とするが、前者は日本の広島とフランスのヌヴェール二都市の災厄を男女二人の個人的物語として代理表象し、身体を伴う主体の交わりによってヒロシマという災厄が理解されていく。一方、後者では、日本／広島、フランス／ヌヴェールの共同体の記憶が既に消失しており、現在の広島を彷徨する男女と原爆ドームを映し出すのみである。この徹底した「断絶」こそが、ヒロシマの今であり、そのドキュメンタリーが逆説的に継承可能性を提示しているとする。

第 5 章　「越境」と「戦争の記憶」の臨界点―岡田利規『三月の５日間』―

2003 年のアメリカによるイラク空爆を描いた岡田利規の『三月の５日間』（戯曲：2005、小説：2007）を取り上げ、「内なる越境」と「戦争の記憶」の脱共同体的継承が同時に展開されていると論じる。＜9・11＞の報復として、アメリカがイラク空爆を開始した 2003 年 3 月 21 日を挟んだ 5 日間、渋谷のラブホテ

ルに滞留する男女の生態は、アメリカやイラク、また有志連合として前者に連なる日本といった国家・民族の共同体からも、それら共同体が醸成するテロ攻撃や報復空爆の大義やサイキからも無縁である。そのような自己疎外を岡田は「超口語」によって徹底させ、主要人物は渋谷を「外国の街」と錯覚する程である。これを共同体内部に留まったままの「内なる越境」であるとみる。『ヒロシマ・モナムール』でも繰り返されているように、男女の性交を戦争＝共同体に対峙する個人性、また身体を伴う主体の究極的表象とするのは慣習的手法ではあるものの、『三月の５日間』の当事者には対峙する共同体も意識されてはいないこと、その地点にあっての戦争の表象であることを明らかにしている。

終章

本論で展開した「越境」と「戦争の記憶」の統合的議論を実践応用することで、今日的災厄の文化表象が可能であると結論する。この主張の有効性を提示すべく、2011 年以降の災厄の文化表象、とりわけパフォーマンス領域の作品群―高山明の観客参加型の演劇『東京ヘテロトピア』(2013)と展示・インスタレーション『横浜コミューン』(2014)、松田正隆の『長崎を上演する』(2015)など―を紹介している。新たな「移動する人々の時代」にあって、対話と文化間理解のために内なる「越境」と「戦争の記憶」の重要性が再浮上しているが、断絶と再現不可能性を不断に認識すること、文芸表象とこれについての議論の妥当性を持続的に検証することを訴えて論述を終えている。

４．本論文の成果と評価

20 世紀、アドルノはホロコースト以後、文学は可能かと問うたが、21 世紀の我々は押し寄せる地球規模の災厄にたじろぎ、これを語り、表象することの困難に直面している。本論文はこの状況にあって、「越境」と「戦争の記憶」をめぐる議論の合流するところ、すなわち共同体からの個人の逸脱と共同体そのものの解除に表象可能性を見出しただけでなく、具体的な災厄の文芸表象を分析することによって、これを裏付けている。社会学と文化表象研究に共通する「越境」と「戦争の記憶」という二つのテーマの統合を試み、学際的研究として成果を上げたと言える。社会学の観点からは、通常共同体的側面が強調されるアルヴァックスの「集合的記憶」概念から、それが「本来持っていたはずの脱共同体的ベクトル」(11 頁)を析出したことを本論文の功績として挙げることができる。表象研究の観点からは、「越境」主体による脱共同体的場の創出とパフォーマンスに災厄表象の可能性を見出し、現代日本文化におけるパフォーマンス＝逸脱遂行の重要性を明らかにしたことを高く評価する。

５．本論文の課題

社会学的見地からは「戦争の記憶」が持っている共同体的なベクトルへの注目は手薄と思われる。ベネディクト・アンダーソンが述べたように戦争の記憶は依然として想像の共同体としての国民国家の核に存在し続けているし、原爆の記憶もいまだに「唯一の被爆国日本」に回収される傾向が強い。「集合的記憶」は共同体のベクトルと脱共同体のベクトルがせめぎあう場と考えるべきであろう。表象研究の見地からは近年のパフォーマンス理論が十分に参照されていないことが惜しまれる。本論における私小説、ドキュメンタリー映画、超口語演劇の考察はパフォーマンスの逸脱概念をめぐる議論に一貫して重なるものである。演じること／再現すること（performance、representation）を、今日的災厄を文芸表象とするにあたっての重要な要素と位置づけ、本格的に議論することが望まれる。これらの課題は、今後、本研究を深化、進展させることにつながるものであり、全体としては、戦争の記憶研究に寄与するものとして、また文芸表象をパフォーマンス領域に開くものとして、本論文を評価することに変わりはない。

よって本論文は、博士（総合社会文化）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以　上

平成 27 年 12 月 12 日